

学びのイノベーション事業及びフューチャースクール推進事業の実施に係る 京都市地域協議会第8回会議

1 日時

平成26年2月21日（金）14:00～16:30

2 会場

京都市立桃陽総合支援学校会議室

3 次第

(1) 開会

(2) オブザーバー紹介

(3) 議事

ア 平成25年度事業実施報告について

イ 協議、指導助言等

ウ その他

(4) 閉会・挨拶

4 参考(配布資料)

- ・「学びのイノベーション事業及びフューチャースクール推進事業の実施に係る京都市地域協議会」第8回会議次第
- ・第8回会議出席予定者
- ・第8回会議座席表
- ・「平成25年度フューチャースクール推進事業成果報告書」(案)
- ・平成26年2月20日フューチャースクール推進研究会(提出資料)
- ・「平成25年度フューチャースクール推進〔実証テーマⅢ〕」
- ・「学びのイノベーション事業(特別支援学校)研究成果報告書(案)」
- ・第8回会議「参考資料」

京都市地域協議会 第8回会議録（概略）

(1) 開会

挨拶 中東校長，（オブザーバー）西廻上席企画監理官

(2) オブザーバー紹介

挨拶 西廻上席企画監理官

(3) 議事等

○事務局（学校事務支援室）から配布資料等について説明

- ・総務省及び文部科学省の報告様式
- ・フューチャースクール推進研究会成果報告書
- ・参考資料（授業記録，公開授業アンケート，教員児童生徒アンケート，新聞記事，在籍状況等）

ア 平成 25 年度事業成果報告について

○学校事務支援室指導主事から説明

①本事業の3年間のあゆみに関して

- ・地域協議会，事業経過，システム開発，前籍校との交流（学習），ICT 支援員
- ・ICT 環境の課題（ICT 機器の経年劣化，ネットワーク上の課題）
- ・次年度以降の活用方針

○桃陽総合支援学校研究主任から説明

②実証校での取組に関して

- ・他府県の支援学校からの問い合わせ（病室無線 LAN 導入に関して）
- ・病弱の支援学校として ICT 環境が必須。環境がなくなれば，出来ていたことが出来なくなる。
- ・児童生徒の学習活動を通じた成長，学校としての成長。学校の研究テーマとの適合性
- ・学校運営協議会の評価の変容（こころの病気・不登校傾向の子どもたちへの適用の可能性）
- ・他府県支援学校と交流 … 事前調整の難しさ
- ・（一人1台環境を活用した）個別支援による学力向上効果（学習習慣定着・学習空白の改善）
- ・書くことが苦手な子どもに対して，TPC へ画像配信が学習に有効になるケース（合理的配慮）
- ・ICT 支援員が居なくなる状態で，現場で受け止められる部分と，そうでない部分がある。

○ICT 支援員から説明

③ICT 支援員の業務内容に関して

- ・トラブル対応（さまざまなトラブルに適切に対応する必要がある。）
- ・授業や行事における ICT 活用に関する支援（活用とその手順に関する提案を行う。）
- ・各種システム・コンテンツ等のアップデート作業（＝専門的スキルが必要となる。）
- ・電源や LAN ケーブルの配線養生作業
- ・年度替りや修理戻りの際の TPC 等の初期化作業

⇒ 来年度に向けてできるだけ，手順書やマニュアルを作成するようにしている。

イ 協議，指導助言等

①平成 25 年度事業成果報告に関して

○病院等のネットワークやソフトのアップデート等についてはかなりの専門的知識が必要。組織で ICT システムを適切に運用するためには，組織の 100 人に対して 1 人ぐらいの多くの専門スタッフが必要となる。病院などでは，システムが動かないと診療行為ができなくなるほどである。支

援体制を整えておかないと、せっかく動き出した桃陽での学習が後戻りしてしまう怖れがある。

⇒ 『プロジェクトが終わると、すべてが終わる。』といった動きにならないように。

⇒ ICT 支援員は、地方交付税としての措置がされているが、自治体予算組みの問題もある。

○ICT 支援員の役割は、教員とともに授業改善ができる方向に進むべきである。

○この研究の成果を教員がつなげていく努力をしなければならない。

○取組によって子どもが変化していく。ICT をツールとして使い、授業が分かりやすくなることは子どもが安心することにもつながっている。

○年配の教員はまだまだ ICT に対する抵抗感があるが、改善していく必要がある。研究によって得られた知見を広め、京都のみならず、全国への普及促進を図ってもらいたい。

⇒ 研究部長等が全国の研究発表の場で実証校の取組について発表する機会が持てた。

②3 年間の実証校での取組を通して、今後に向けての提言

『本事業のビフォー・アフターを想起して』

○作文がなかなか書けなかった子どもが、ICT を活用することで読書感想文や文集がよく書けるようになった。ICT が子どもの能力を発揮させるための支援ツールとして活用できることを改めて認識させられた。

○子どもたちが自信を持って自分がやれた。という自己肯定感が持てたのではないか。子どもの実態を見つめながら研究を進めたと思う。財産となっているこの取組をやり続けることは困難ではあるが、新しい教員や新しい子どもたちに次第送りができるように受け継いでいくべきであろう。

○「取ってつけたような ICT」から、「普通に使う ICT」に変化してきた流れがこの取組を物語っているだろう。先生方も ICT の存在がもはや肌感覚となっていて、ICT のなかった時代は忘れていくかもしれない。肩肘張らない ICT や無線 LAN の取組を継続するために、ICT 支援員が常駐しないとコストが低い中で『自活する』ためには、先生方が横に広げて共有していくことが重要になってくる。成果とともにつまづきの部分も共有してほしい。

○教育 ICT にとって、今後はクラウドが主流になってくるであろう際に、知的財産の問題や、「学校内」という概念が法的にクラウドのどの部分まで及ぶのか。が、議論されていくだろう。

○まだまだ、教育現場では ICT が使われていないというイメージがあるが、実際には実証校のように大いに活用することを考えれば、もっと広げていく必要性を感じる。

○分教室と本校との壁が低くなったことは、先生も子どもも感じているであろう成果である。これに関しては一貫して取組まれたと思う。

○ICT 支援員の人材育成と観点から、教員免許を持っている人を ICT 支援員として学校に配置していくようなことができれば、学校教員も安心して ICT を活用できるようになるだろう。人材育成は急務であるように思う。

○これまでは無理してやってきたこともあるかもしれないが、これからは子ども一人ひとりの個に応じた取組、子どものためにどうしたらよいか、じっくり向き合った取組を進めて欲しい。

○ICT は見る・見せるための道具として有用であり、ここぞというときに活用すればよいだろう。子どもの成長に資するという意識をもっていれば先生も老若問わず使っていけるものである。

○TV 会議システムを活用して離れた場所を結ぶ取組は、自校でも子どものコミュニケーション力を向上させるのに有効であった。実証校の成果を自校でも生かしていきたい。

○できたらいいな。という思いを ICT で実現できた。このシステムを維持しないと、病弱教育そのものがしぼむような気がする。そのためにも ICT 支援員は必要だと思う。一校に常駐ではなく、地域の学校群でシェアするような方法も考慮してほしい。

○子どもたちの可能性をつぶさない。卒業後も社会人としても活かしていけるようなチャンスを、継続して取組む方向で提供していただきたい。

○教育とテクノロジーとを統合できる、教育の未来を支えられるような人材育成が求められていくだろう。

- 桃陽の ICT は「Important Communication Tool」だったと思う。
- ICT に慣れた若い教員と、授業に長けたベテラン教員が相互に補完しながら授業づくりや研究ができれば、よりよい活用ができると思う。
- 情報モラルや情報安全の面からの取組も重要になってくるだろう。
- 取組によって子どもたちに「つながる学び、広がる学び。」が如実にあらわれたように思う。実証校の研究テーマである「学びを支える」は「生きることを支える」ことであると考えている。
- システム開発の成果は汎用性があると思われる。
- 学校において当たり前に使われるようになってきた ICT の教育利用を進めていくためには、教員養成機関と連携した取組や教員採用における観点として取り入れていく必要があるだろう。将来は、ICT 活用ができる教員が学校に居り、それを支える ICT 支援員が学校に居るような環境になっていくかもしれない。
- できなかった授業が ICT によってできるようになった実証校の功績は大きい。全国の病弱特別支援学校が動き出している現実がある。とくに病院の病室に教育用の無線 LAN が入ったのは、京大病院と府立医大病院が日本で初めてとなった。各病院関係者が無線 LAN でも病院の電子カルテシステムに影響がないこと、教育的なさまざまな取組ができることを理解していただいたことは大きいものがある。病弱特別支援学校において、子どもに学力をつけさせ、また自己効力感を生む取組、コミュニケーション能力や社会性の向上にメリットがあることが実証されたのだろう。
- 東京で行われた小児がん親の会で、京都の親御さんが「京都はいいでしょ。」と、自慢されていたことが嬉しかった。
- ICT が学校に整備され、インフラとなることが、教育の基盤になっていくと感じた。

(4) 中東校長から閉会の挨拶

「本会議も最後を迎えて感無量です。前校長のチャレンジ精神から受けた事業ではありますが、そうしたチャレンジ精神を引き継ぎ、条件が厳しくなるとはいえ、3年間の成果を生かしてこれからも進んでいきたいと考えております。これからもあたたかい御支援をお願いいたします。」

第8回会議 参加者

1 地域協議会委員等

(敬称略)

氏名	所属・役職
滝川 国芳	東洋大学文学部教育学科教授【座長】
山村 節子	全国特別支援学校病弱教育校長会副会長，全国病弱虚弱教育研究連盟理事長 (静岡県立天竜総合支援学校長) [公務のため欠席]
桶谷 守	京都教育大学教職キャリア高度化センター教授 (コミュニティ・スクール研究推進委員長)
黒田 知宏	京都大学医学部附属病院 教授・医療情報企画部長・病院長補佐
神月 紀輔	京都ノートルダム女子大学心理学部准教授
大畑 眞知子	京都市立藤城小学校長
森本 哲	京都市立松原中学校長 (京都市立中学校教育研究会情報教育部会会長)
竹内 香	京都市立鳴滝総合支援学校長
(氏名 略)	京都市立桃陽総合支援学校保護者代表 (PTA会長)
柴原 弘志	京都市教育委員会指導部長【副座長】
川井 勝博	京都市教育委員会総務部学校事務支援室長【プロジェクトリーダー】
中東 朋子	京都市立桃陽総合支援学校長

2 オブザーバー

西廻 昭	総務省近畿総合通信局情報通信部情報通信振興課上席企画監理官
------	-------------------------------

3 校内推進委員会(プロジェクト)

京都市立桃陽総合支援学校教員

京都市教育委員会 総合育成支援課指導主事

京都市教育委員会 総合教育センター指導主事

京都市教育委員会 学校事務支援室指導主事

4 その他

ICT 支援員

西日本電信電話株式会社京都支店

エヌ・ティ・ティ・コム チェオ株式会社

株式会社ジェイアール四国コミュニケーションウェア

株式会社ピーパルシード

5 事務局

京都市教育委員会 学校事務支援室